

ニシハラ 西原 能美郡栗津郷に屬する部落。

ニシフタクチ 西二口 能美郡板津郷の二口を、明治に至つて西二口と改めた。

ニシフタマタ 西二又 鳳至郡七浦庄に屬する部落。

ニシホンガンジベツイン 西本願寺別院 ↓ホンガンジベツイン 本願寺別院(一)。

ニシマタ 西俣 能美郡輕海郷に屬する部落。垣内に上杉があり、上杉輝正の墓があるといふ。

ニシマタガハ 西俣川 ↓ゴウタニガハ 郷谷川。

ニシマルヤマ 西圓山 鳳至郡七浦庄圓山の部落を、明治に至つて改稱したものである。

ニシミカイ 西三階 鹿島郡三階良川保には三階と稱する部落が二つあつたので、明治に至りその一つを西三階とした。

ニシミカゲテヨウ 西御影町 金澤の町名。此の地はもと寶久寺河原と稱し、犀川の河原であつたのが、慶應三年卯辰山を開拓した頃、こゝに新川除を築き出して町地とした所である。因つて明治三年七月卯辰山を東御影町と名づけ、此の河原の築地を西御影町と號し、東西土地相隔るに拘らず、共に卯辰山なる卯辰神社の氏子としたが、六年更に西御影町は犀川神社の氏子地に屬せしめられた。その後一時繁昌したが、十三年五月廿八日出火して家屋多く焼失し、爾後町勢甚だ衰へた。

ニシムラアツユキ 西村篤行 通稱太沖。審之と號し、所居を得一館といふた。父は越中城端の買入葦屋長兵衛。篤行は明和四年に生まれ、天明三年京によつて醫術を學ぶの傍、

西村遠里に天文曆數を習ひ、夙に頭角を露した。同七年遠里歿して子がなかつたので、同窓篤行を推して西村氏を冒さしめた。翌年篤行は大坂に赴きて藤田剛立の門に入り、寛政十一年加賀藩に召されて明倫堂に天文の師範となつた。然るに篤行の究める所は形氣の學で講義に適しなかつたから、一年餘で職を罷め、城端に歸つて醫を業とし、傍ら符天曆・寶符曆を編んだ。文政四年七月前田齊廣再び之を召して御醫者格とし、十五人扶持を與へた。篤行のより又金澤に在り、翌年正月以降遠藤高璟の監督の下に金澤分間繪圖調製の事に従ひ、八年秋高璟と共に尾星を觀測し、天保元年十二月分間繪圖を完成した。篤行の天文曆數に關する著書には、授時解十五冊・貞享曆解十五冊・加州改算曆・天經或問注解・氣朔曆・新曆法稿・金府日時要略・歲實消長法・實驗錄等がある。天保六年五月廿一日六十九歳を以て歿。昭和三年十一月特旨を以て正五位を追贈せられた。

ニシムラクマ 西村熊 諱は貞勝。藩の老臣本多氏に屬し、明治元年閏四月父清之進の後を受けて、祿百石を襲いだ。熊、容貌秀麗、智略多く學を好んだが、四年十一月廿三日同志と共に、故主本多政均の仇菅野輔吉を討ち、五年十一月四日自裁を命ぜられた。享年廿四。

ニシムラタダハル 西村忠晴 通稱六右衛門・右馬。右馬助長郷の子。祿千石を受け、御馬廻に班し、寛永十六年前田利常の隠栖に從うて小松牧島に移つたが、歿年は詳かでない。

ニシムラチカノリ 西村周訓 通稱隼人。實は槻尾甚左衛門の次男。文政七年十二月養

父清左衛門の遺知四百石を受けたが、罪を獲て天保九年閏四月十三日公事場に糺明せられ、人持組津田乙三郎に御預となり、同年五ヶ山流刑を命ぜられた。

ニシムラナガサト 西村長郷 六右衛門又は右馬助と稱し、前田利長に仕へて千五百石を受けた。右馬助大聖寺城の攻撃に従ひ、正門外廂屋上に攀登し、放銃奮闘して功を立て、大坂の役には遊軍の特であつた。寛永八年に御旗奉行となり、十四年歿。子孫世々藩に仕へたが、八代隼人周訓の時斷絶した。

ニシムラヒコベエ 西村彦兵衛 初めて前田利常に祿せられて二百五十石を受けた。子孫世々藩に仕へる。

ニシムラヨサエモン 西村與左衛門 初め御細工者であつたが、後御細工者小頭に任じて新知八十石を受け、天明二年二十石を加へ、五年又三十石を加へ、組外に列し、御能方御用を勤め、寛政五年二月八日歿。子孫藩に世襲する。

ニシヤチ 西谷内 羽咋郡鉦打郷に屬する部落。正保・寛文・貞享の高辻帳には西谷とあるが、元祿中に舊名の西谷内に復した。

ニシヤチジヨウ 西谷内城 羽咋郡西谷内に屬し、堡址は鹿島郡熊木より本郡富木に越える山路の傍に在る。初め畠山家繼これに居り、天正の頃は長綱連の家士國分五郎兵衛が住んだといふ。

ニシヤマ 西山 能美郡白峰のうち風嵐部落の西方に當る山。高さ八六二米。地質係羅系。

ニシヤマ 西山 能美郡久常の内の小字。ニシヤマ 西山 羽咋郡堀松の内の小字。

藩政時代には無家の地で、村高は近在から支配した。

ニシヤマ 西山 鳳至郡下町野郷に屬する部落。

ニシヤマドノ 西山殿 ↓チンユウ 珍祐。ニジユウニイシキリ 二十人石伐 加賀藩の石工で、定員二十名であつたが故に名づける。寛文三年の割場定書に、『二十人石伐、石方之御用有之時分相渡、其外は犀川・淺野川々除御用相動申候。外には召任不申候事。』とあり、十年戸室山の石切の爲山奉行にその人數を割場から懸渡した書付もある。寶曆六年の文書に『十五人、二十人石切、右石切共云々』とあるから、當時定員に滿ちてゐなかつたが、それでも二十人石切といふたのである。

ニジユウニシマチ 二十人町 金澤の町名。元祿六年の土帳に、小立野二十人町或は小立野足輕町二十人町など、載せ、延寶金澤圖には、明組足輕等の組地なることを記載するが、後には持筒足輕の組地としたといふ。蓋し藩初以來、足輕は二十人或は五十人を一組としたから、其の組地を二十人町或は五十人町と呼んだのである。天正十二年藩士千福長左衛門を足輕頭に命ぜられ、鐵炮足輕二十人を預けられたのが其の初であらうといふ。

ニジユウロクヤマチ 二十六夜待 藩政の頃、七月二十六日に二十六夜待が行はれた。三光月待ともいはれる。同夜丑刻前に上弦の月が最初に兩端を、次いで中央を現す如く見えるのを觀賞するもので、寺町・卯辰山等高臺で之を待つ爲に、歌俳論曲の會を開き、野田寺町諏訪八幡では月拜祭の神事があつた。